

一八六六年恐慌(三)

三宅義夫

五 (承前)

一八六五年十一月二十日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「ノールズ [Knowles, Alfred Knowles, マンチエスタ
ーの商人でエンゲルスの友人] から(そしてできるだけ早く) 必要なデータを手に入れてくれるのを忘れないように。
ミユール機の紡績男工であれスロツスル機の紡績女工であれ、その平均週賃銀。平均番手(または任意の番手でもか
まわない) でどれだけ糸ないし綿花(紡績中に失われる屑も計算に入れて) が平均して一人によって一週間に紡が
れるか。もちろんさらに、任意の(労賃に対応する) 綿花の価格と糸の価格。この詳細を入手しないうちは第二章
(das zweite Kapitel) を書き上げることができな^(一)。」

(一) マ・エ・レ研究所編 *Briefe über „Das Kapital“* (1954) ではこの「第二章」というところに編集者註を付して、
「マルクスはこの手紙で第二章と記しているが、書き誤りである。これらの問題は初版の第三章——第二版の第三篇と一致す
るところの——で取扱われている」と記しているが、マルクスは現行『剰余価値学説史』がそれからとられている「一八六一
年八月から一八六三年六月までに書かれた二十三冊からなる『経済学批判』という原稿」を書いたのちに執筆したと見られて
いる「直接的生産過程の諸結果」においても、——すなわち著書『経済学批判』第一冊を書いた当時はいまでもないが、そ
のあとのこのころにあっても——、『資本論』のなかでは著書『経済学批判』で述べた「商品および貨幣」は含まないで、現

行『資本論』第二篇「貨幣の資本への転化」を『資本論』の第一章とするつもりであった。上の手紙はしたがって、他に根拠のないかぎり、一八六五年十一月当時においてもまだ「商品および貨幣」を『資本論』のなかでは再説しない予定でいたことを示すものと受取られるべきであろう。すなわちここで「第二章」といっているのは、現行第三篇「絶対的剰余価値の生産」を当時『資本論』第二章とする予定であったからである、と考えられる。

マルクスがここで知りたいとしていた上のような紡績のデータは、この一八六五年当時のアブノーマルな紡績事情についてのものではなく、剰余価値生産にかんする一般的記述にさいして例示として用いるためであったであろう。現行『資本論』第三篇——初版の第三章——の価値増殖過程、不変資本と可変資本、剰余価値率などの諸章においてマルクスがもっぱら紡績のばあいを例にとりて論を進めていることは、周知のごとくである。上の手紙にたいするエンゲルスの返書は『往復書簡』にはない。なお、剰余価値率の計算方法について具体例を挙げて説いているところで、初版では「まず紡績業を例にとろう。データは一八六〇年のものである」云々としているが(初版、S. 186)、第二版後ではこれを書き換え、そしてそこに「つぎのような註を入れているところがある。このことはいまここでのことと——上の手紙で聞き合せている数字だけでは剰余価値率の計算はできないが——なんらかの関連があるようにも推測される。註(三一)、「第二版への註。第一版で挙げた一八六〇年についての一紡績工場の例は若干の事実上の誤りを含んでいた。本文で挙げたまったく正確なデータは、マンチェスターの工場主が私に提供したものである」と(Bd. I, S. 227-8, 長谷部訳、青木版三八八ページ)。初版の例ではけっきょく剰余価値率は $60/70$ 、約八六パーセントという計算になり、第二版の改訂では $80/52$ 、一五三 $\frac{11}{18}$ パーセントということになっている。

上の手紙は一八六六年恐慌に関連ある手紙ではないが、このころ紡績についてのこのようなデータをマルクスが求めていたことをしるしておくために掲げておく。

一八六六年二月十日付マルクスからエンゲルスへの手紙。「今度は皮膚にやってきた〔疔の再発のこと〕。……僕にとって一番嫌だったのは、肝臓病が消え去った一月一日以来すすてきに進んでいた僕の仕事が、中断されることだった

「マルクスはこの一八六六年一月一日からいよいよ印刷に付すべく『資本論』の清書、成文にとりかかっていた、——同年二月十三日付エンゲルスへの手紙」。『腰かけること』などはもちろん問題にならなかつた。いまでもまだうまくゆかない。しかし横になりながら——昼のうち短い間合い間ではあるが——仕事をつづけている。本来の理論的な部分をさきに進めることはできなかった。それには頭脳があまり弱っていた。だから、僕は『労働日』にかんする篇を歴史的に拡げた。このことは僕の最初のプランのなかにはなかつたのだが。いま僕によって『挿入されたもの』は、君の本にたいする一八六五年までの補足(Ergänzung) (スケッチ風な) をなすものであり(そのことを僕は註でもいう)、また将来にたいする君の評価とその現実との間の差異を十分に正当付けることになるものだ。したがって僕の本が出るにすぐ、君の本の第二版が必要となるしまたと同時に容易になるわけだ。理論上必要なものは僕があげよう。君は君の本の付録(Appendix)として与えねばならぬところのこのとき以後の歴史的補足(Zusatz) についていうと、『工場報告書(Factory Reports)』『児童雇傭委員会報告書(Children's Employment Commission Reports)』および『衛生局報告書(Board of Health Reports)』以外の資料は、すべてまったくの屑のものであって科学的には使えない。この資料を克服することは、疔を患っていない君の労働力をもってすれば三カ月もあれば楽にやれるだろう。(2)(3)……最近の『工場報告書』の一つで見たのだが、ジョン・ワッツ(John Watts)が『機械について(On Machinery)』というパンフレットを出した。僕にそれを送ってくれるよう僕の名で彼に頼んでみてくれないか。(4)

(2) さきに——一八六三年八月十五日付の手紙——マルクスが児童雇傭委員会の報告書が刊行されたことをエンゲルスに告げ、そしてそれが全部出たさいには君の本にとってすばらしい補遺(Nachtrag) になるだろうといっていたことを見たが、いまここで、この年一八六六年一月からとりかかっていた『資本論』の印刷用原稿の清書、成文の途中で『労働日』にかんする「篇」を「歴史的に拡げた」こと、そしてこれは「君の本にたいする一八六五年までの補足」をなすものだと、いうことをエ

ンゲルスに告げているわけである。なおこの手紙では「労働日」にかんする「篇 (Abschnitt)」と書かれているが、これは「労働日」にかんする箇所、部分というほどの意味である。「労働日」は初版では第三章の四で扱われている。また上では「歴史的」といっているが、——「労働日」にかんする節 (§) は五印刷ボーゲンを占めている。そのうち大きな部分は資料的な材料 (materielle Stoff) だ」(一八六七年六月二十七日付マルクスからエンゲルスへの手紙)。

上で「そのことを僕は註でもいう」といっているが、『資本論』第三篇(初版では第三章)中の「労働日」のところで「工場検査官報告書」等によってイギリスの労働者階級の状態を例証として挙げてゆくはじめに当って、マルクスはつぎのような註を入れている、——「イギリスにおける大工業の発端から一八四五年までの期間については私はところどころで言及するにどめ、この期間については、フリードリヒ・エンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』、ライプチヒ、一八四五年の参照を讀者におすすめる。エンゲルスが資本制生産様式の精神をいかに深く把握していたかは、一八四五年以来公けられた工場報告書、鉱山報告書、等々がこれを示しており、また彼が状態をいかに驚くべく詳細に描いたかは、彼の著作を、その十八年ないし二十年のちに公刊された『児童雇傭委員会』の公けの報告書(一八六三—一八六七年)とただちよと表面的に比較してみただけでもわかる。すなわち、この後者は、工場立法が一八六二年までにまだ実施されていなかった——部分的にはいままお実施されていない——産業部門を取扱っているのである。だからこれらの部門では、エンゲルスによって描かれた状態にたいする多少なりとも大きな変更は外部から押しつけられていなかったのである。私は、私の例示を主として一八四八年以後の自由貿易時代から借りてこよう。……ついでにいうと、イギリスがここで前面に出て役割を演じるのは、この国が資本制生産を典型的に (klassisch) 表わしているからであり、またこの国だけがここで取扱う対象にかんする公けの継続的な統計を有するからにはかならない」(『資本論』, Bd. I, S. 248-9, 長谷部訳、青木版四一九—二〇〇頁)。なお、——「無制限な放埒行為のため、資本がついに法律的規制の鎖につながれるにいたった領域」にたいし「労働力の擲取が今日もまだ無拘束であるか、あるいは昨日まではまだ無拘束であった生産部門」(同上、Bd. I, S. 252, 訳、四二四—二四五頁)。「児童の状態がわかれば、大人、ことに未婚および既婚の婦人の——しかも、それに較べれば木綿紡績業などはきわめて快適で健康的な仕事のように見受けられる産業部門における——状態は推知できよう」(同上、Bd. I, S. 253, 訳、四二六—二六七頁)。

ここでやや考証的なことをつけ加えておこう。マルクスは上の一八六六年二月十日付の手紙では「いま僕によって『挿入されたもの』は、君の本にたいする一八六五年までの補足をなすものである(そのことを僕は註でもいう)」と記しているが、

『資本論』の註の方ではエンゲルスの記述と比較するものとして挙げている『児童雇傭委員会報告書』を「一八六三—一八六七年」としている（初版ではS. 208）。右の手紙が書かれた一八六六年二月にはこの『報告書』はまだ一八六五年刊の第四回までしか出ていなかったし、また『工場検査官報告書』も一八六五年十月三十一日に終る半年間の報告書が出たころであり、また『衛生局報告書』もまだ一八六五年刊の第七回までしか出ていなかった。このことはつぎのマルクスの手紙からも窺うことができる。——「当地では数日前から児童雇傭委員会の第五回報告書が出た。これで製造工業にかんする調査は終りであつて、このあとは農業で散在的に用いられている婦人および児童の『組織された労働隊 (organised gangs)』にかんする補遺が出るだけだ。一八五〇年以來のブルジョア的樂天主義に手ひどい打撃を与えるものとしてこれら五つのブルー・ブック以上のものではない。そのうえ、数日前衛生局の第八回報告書が出版されたが、このなかにはことにプロレタリアートの住居にかんするきわめてくわしい調査が含まれている」（一八六六年七月二十一日付マルクスからエンゲルスへの手紙、なお同月二十七日付マルクスからエンゲルスへの手紙参照）。つまり、一八六六年二月の上の手紙のころにはこれらの諸『報告書』はまだ一八六五年までのところしか出ていなかった（児童雇傭委員会の報告書は毎年の状況についての年報ではなく、その刊行が一度にでなく数年にわたつたというものであるが）、それで「一八六五年までの補足」といつていたのであるが——また「労働日」のところではじっさいだいたいにおいてそこまでの諸『報告書』しか使われていない——、その後『資本論』第一巻のこのあとを書き上げて刊行に付すまでの間に、『児童雇傭委員会報告書』についていえばそれは第五回、第六回までが出て完結した。そこでさきの『資本論』の註では『児童雇傭委員会報告書』を「一八六三—一八六七年」としていたのである。なお付言しておく、第四篇 S. 448—8の註一九〇のところでは『児童雇傭委員会』の報告書（一八六三—一八六六年）としており（初版ではS. 417）、また同じく第四篇のS. 517では同委員会の第五回報告書——一八六六年刊——を引用するに當つて「最終報告書 (Schlußbericht)」と記してゐる（初版ではS. 486）。これは、ここを書いていた當時にはまだ一八六七年刊の第六回報告書は出ていなかったはずであるから、そのためこのように記していたとも考えられるし、あるいは右の一八六六年七月の手紙でいつているように製造工業にかんする調査はこの第五回報告書で終りであつたためこう記していたとも考えられる。このばあいはもしかすると後者によるものであつたかもしれない。

またこまかいことであるが、この『資本論』の註で、「彼の著作を、その十八年ないし二十年のちに公刊された『児童雇傭委員会』の公けの報告書（一八六三—一八六七年）とただちよつと比較してみただけでも」云々と記しているこの「十八年ないし

二十年のち」というのは一八年ないし「二十二年」でなければならぬであらう。ここで「十八年ないし二十年のち」といっているのは一八六三年ないし一八六七年に、というわけであるが、一八六三年ないし一八六七年は「彼の著作」つまりエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』が一八四五年に出てから十八年ないし「二十二年」のちであるからである。これはマルクスのたんなる指折りちがいがいい、ないし書き誤りであろうかというのと、すこし推測を加えてみると、これはそうではなく、さきの「一八六五年までの補足」といっていたことと関係があるように思われる。すなわち、前記のようにこの「労働日」の原稿を書いていた一八六六年二月ごろには『児童雇傭委員会報告書』は一八六五年刊までしか出ていなかったので一八四五年から数えて「二十年」と記し、その後『児童雇傭委員会』の公けの報告書」というところにはあとで（一八六三—六七年）と入れたが、そのとき「二十年」の方を併せて訂正しておくのを忘れたのではなからうか、というように思われるのである。

なお、『資本論』第一巻は序文の日付は一八六七年七月二十五日であるが、その本文は一八六七年三月に書き終え（僕は書物の完成 (Fertigssein) を君に知らせることができずまでは君に手紙を書かないつもりでいたが、いまついに完成した。：：来週自分で原稿を持ってハンブルグに行かねばならない）——一八六七年三月二十七日付マルクスからエンゲルスへの手紙）、マルクスはこれを携えて四月十二日にハンブルグのマイスナーのところに出かけた（一八六七年四月十三日付マルクスからエンゲルスへのハンブルグからの手紙）。ところで『児童雇傭委員会報告書』の最終第六回が公刊されたのは、この「一八六七年三月末」のことであったが——「一八六七年三月末に公刊された『児童雇傭委員会』の第六回の最終の報告書は、農業労働隊制度だけを扱っている」（『資本論』、Bd. I, S. 732, 長谷部訳、青木版一〇六四ページ）——、これはさっそく第一巻のなかで使用されている。マルクスは、エンゲルスが「第四章」つまりのちの第四篇の校正刷を見て、「第四章はほとんど二〇〇ページもあるのに、小さく印刷されていてほとんど目につかない表題の付してある四つの節にしかかっていない。そのうえ、思想の進行はたえず例証によって中断されており、しかも例証されている点ですこしも例証の終りに概括されていない」（一八六七年八月二十三日付マルクスへの手紙）という注意を寄せたのに答えて、つぎのように述べている。「第四章にかんしてだが、事柄そのものを、すなわちそれらの関連を見出すのにひどく骨が折れた。ついでそれができてから、最後の仕上げのときにブルー・ブックがつきからつきへとこのなかにとび込んできた。そして僕は、僕の理論的帰結が諸事実によって完全に確証されているのを見て、有頂天になった」（一八六七年八月二十四日付エンゲルスへの手紙）。これは直接には「第

四章」にかんしてのことであるが、この児童雇傭委員会の第六回報告書にあつても、それが出たのが一八六七年三月末であつたにもかかわらず、第六章（現行第七篇）「資本の蓄積過程」のなかで一般的法則の例証を挙げているところにおいて、農業労働隊制度がもつぱらこの第六回報告書を用いて説明されている（Bd. I, S. 732-6, 訳、一〇六四一七〇ページ。初版、S. 684-8）。また『工場検査官報告書』について見ても、一八六七年刊の「一八六六年十月三十一日に終る」報告書のところまでが第一巻で使われている。現行版でいうとこれは第四篇の S. 443 の註一八四（長谷部訳、青木版六八三ページ）、S. 448-9 の註一九〇a（訳、六九〇一ページ）、第六篇の S. 588-9（訳、八七七一九ページ）、第七篇の S. 676 の註八五（訳、九九三ページ）、S. 747-8（訳、一〇八六七ページ）が使われているが、このうち第一巻の終りの方の第七篇の S. 676 の註八五、S. 747-8 のところは初版からその箇所にあるものであり（初版、S. 628, 註八五、S. 696-7）、また初版では巻末に（付録 Anhang の「価値形態」の前）に「第一部の註への補遺（Nachtrag zu den Noten des ersten Buchs）」として九つの追加を入れているが——これはこのなかで「現在（一八六七年四月六日）」と記しているところもあるが（「補遺」の（一）、工場法拡張法が一八六七年八月十二日に議會を通過したとか、労働時間取締法が一八六七年八月十七日に通過したと記していることから見ると、校正中に書き加えられたものと思われる——、第一巻の前の方の現行第四篇 S. 443 註一八四のそれはこの「補遺」の四「第四章註一八四へ」をそこに挿入したものであり、S. 448-9 の註一九〇a は「補遺」の（三）「第四章註一七五へ」がそれであり、第六篇の S. 588-9 の工場検査官レッドグレイプの報告からの引用は「補遺」の（七）「第五章【初版では現行第六篇は第五章のなかに入っていた】註六六へ」を採ったものである。これを見ると、一八六七年刊の「一八六六年十月三十一日に終る」報告書——「名目的には一八六六年十月三十一日までであるが、じっさいには一八六六年十二月三十一日まで及んでいる」（初版、S. 760）——を手にしてマルクスは、終りの方の第六章にはこれをただちに使用し、そして第四章、第五章にたいしてはあとから「補遺」の形で使用した、ということになる。このように『児童雇傭委員会報告書』にしても『工場検査官報告書』にしても、その公刊が第一巻脱稿に、ないし刊行に間に合ったギリギリのところまでが使われたわけである。そしてまた以上のことから見ても、これらの『報告書』、そしてとくに児童雇傭委員会のそれなどはたまたま一八六三年から刊行されたのであるが、これらの『報告書』を用いることによって、『資本論』第一巻の記述が「最初のプラン」とややちがって資料的に大きなつけ加えが行われることとなつたのは、ひとり「労働日」のところだけにとどまらなかつた、と見ることができよう。

(3) マルクスは前に見たように一八六三年に児童雇傭委員会の第一回報告書が出たときエンゲルスにこれは『イギリスにおける労働者階級の状態』にとつて「すばらしい補遺」となるだろうと書き送ったり、また上のように「労働日」を書いているときにもこれは「君の本にたいする一八六五年までの補足」をなすものであり、君の本の「第二版」を出すことが必要だとし、またこのあとつぎのような手紙も書いている——「シュタンプはメインツから僕に手紙をくれ、労働者たちの間で君の本『状態』にたいする需要は日に日にましてきており、君は党の立場からも第二版をつくらなければならないといっている」(一八六六年七月七日付エンゲルスへの手紙)。このようにマルクスは再三、第二版を出すことを直接間接に勧めていたのであるが、けっきょく『イギリスにおける労働者階級の状態』の第二版は——期待されたような意味での第二版は——出されなかった。一八九二年にドイツ語第二版が出されたが、これは「この青年時代の著作を変えずにいま一度読者の前に提供する」ことを原則としたものであり(エンゲルスの序文)、そしてこの序文のなかでエンゲルスはつぎのように述べている、——「私はこのドイツ語版でもまた英語の諸版でも(一八八六年に英語版がアメリカで、また一八九二年にイギリスで出版された)、本書を今日の事態に合うようにしようとは、すなわち一八四四年以後に生じた変化を一々数え上げようとはしなかった。そしてそれは二つの理由からである。第一に、もしそうしたら私はこの書物の分量を二倍にしなければならなかったであろう。第二に、マルクスの『資本論』の第一巻が、一八六五年ごろの、つまりイギリス産業の繁栄がその頂点に達した時代のイギリスの労働者階級の状態を詳細に叙述している。だから私は、マルクスによってすでに述べられたことをくり返さねばならぬことになったであろう」(Dietz Verlag, Berlin 1952, S. 18, 大月選集訳、補巻2、四九一ページ)。

(4) このあとマルクスはこのワッツの書物についてエンゲルスにあてて、「ワッツに手紙を書くことをお忘れなきよう、僕はいま機械にかんする章(Kapitel über Maschinen)に到達しているので」(一八六六年二月十三日付の手紙)、「ジョン・ワッツの『機械について』(On Machinery)はこうなっている」(同年三月二日付の手紙)と再三催促の手紙を書いている。この On Machinery というのはワッツの著書 Trade Societies and Strikes, Machinery and Co-operative Societies, Manchester 1865 のことであろう。マルクスは「機械にかんする章」といっているのは第四章「相対的剰余価値の生産」のところ、ないしそのなかの「機械および大工業」のところを指しているであろう——入ってゆくに当つて、ワッツが前年右のような表題の書を出していたのでそれを見てみたいと思つたのであろうが、しかしワッツのこの書については『資本論』ではそのあとの第五章(現行第六篇)中の「個数賃銀」のところで「個数労働者は、雇主の資本で働いても、じつは自分

自身の主人である」といったワッツの記述を一、二掲げているにすぎない。そしてそのさいマルクスはこう記している、「私がこの著作を引用するのは、この著作は、とくに腐敗したあらゆる弁護論的きまり文句の真の下水溝だからである」、昔はワッツ氏はオーウェン主義をとり、財産とは盗奪だといっていたが、「もうむかしばなしである」と(Bd. I, S. 577, 註四五、長谷部訳、青木版八六一ページ。初版、S. 538)。また「弁護論者ワッツでさえも」云々と(Bd. I, S. 580, 註五一、同上訳、八六六ページ)。読んで失望したのである。なおワッツは当時マンチェスターに設けられていた Central Relief Committee のメンバーであつて、既掲のように「The Facts of the Cotton Famine」を出した。

以上一八六二年から一八六六年の恐慌前までの間にマルクス、エンゲルスの間でとり交わされた手紙を日付順に見てみた。つぎに『資本論』のなかでこの「綿花恐慌」の期間におけるイギリス経済の状況についてどういう記述をしているかを見てみることにしよう。

六

既述のように南北戦争がはじまったのは一八六一年四月、そして綿花の価格ははじめの数カ月は大した値上がりを示さなかったが、八月末から強く上がりはじめ、この年一―四月にはだいたい七ペンス半見当であつたのが八月末九ペンス、九月末一〇ペンス、十月末一二ペンス、つまり一シリングとなつた(ミドリング・オルレアンズ、一封度当り、W. O. Henderson : op. cit. p. 123—3)。他方、一八六〇年は「イギリス木綿工業の絶頂」であつたが、この過剰生産のあとをうけて一八六一年夏ごろからアジア、オーストラリア市場においてイギリス綿製品の供給過剰、滞貨が現われてきた、——マンチェスター商業会議所の年次報告についてのマルクスの一八六二年二月の記述。一方において綿

花飢饉が現実のものとなってきたとともに、それと時を同じくして他方において製品の供給過剰、ということになった。工場はショート・タイム操業、あるいは閉鎖となった。そして綿花価格は一八六二年一月末に一シリングをこえて一三ペンスとなったのち、しばらくの間保合をつづけたが、しかしふたたび同年六月末一五ペンス、七月末一八ペンスとあらたな値上がりを示してき、八月末にはさらに大幅に上昇して二六ペンスと年初の倍となった。「綿花市場の Schwindel」とその結果たる日々の値上がり」（一八六二年七月三日付エンゲルスの手紙）、「すさまじい割合を辿っている綿花 Schwindel」（同年九月はじめのエンゲルスの手紙）。こうしたなかで綿業労働者の失業は増加をつづけ、一八六二年十一月、十二月には綿業地域の被救恤者数はピークを示した。

一八六二年の八月末、九月末に二六ペンス $\frac{1}{2}$ までになった綿花価格はこのあとすこし下がってきて、翌一八六三年も夏ごろまで二一—二三ペンスのところであった。綿花価格の「下落」。インドはじめ世界各地からの綿花輸入がだいにふえてきた。投機のために買った糸の一部を売ろうとしたが、売ったら利益があるどころか損をすることになる、という一八六三年一月のエンゲルスの手紙。様子がやや変ってきたわけである。また一八六一年秋には綿花飢饉が現実化し、それとともに供給過剰とからショート・タイムが広がり、小工場の破滅が生じたが、一八六二年秋には「在庫品の価値が——倉庫に在庫品を持っていたかぎりでは——高まり、かくして、さもなければかかる恐慌のさいには不可避である恐るべき減価を免れた」（一八六二年十月の工場検査官報告書）というように事態が推移した。過剰生産、供給過剰の規模はきわめて大きかったが、前掲のように一八六二年の秋および一八六三年の春には「ついで間の過剰生産の時期の後に予想していたよりもはるかに高い価格で綿製品のストックを売り切ってしまうことができた」ということになった（前掲ヘンダースン）。「一八六〇年の過剰生産が世界市場に吸収されるまでには、二年から三

年かかった」(一八六三年十月の工場検査官報告書)が、過剰生産、供給過剰の問題は綿花飢饉と絡み合いつつかくて解決してゆき、他方、世界各地からの綿花の輸入が——価格はなお平時のその数倍でありかつ品質は悪かったが、また輸入はかかる高価格によって促進されたものであったが——漸次増大してきた。マルクスは「一八六二年から六三年までは完全な崩壊」としているが、かくしてついで「崩壊」後の事態となってくるわけである。

綿花価格は一八六三年の秋から年末にかけてふたたび引締り二七—二九ペンスを上下し、翌一八六四年の夏七、八月には三〇ペンスをこえ——七月末三一ペンス $\frac{1}{2}$ ——、綿花飢饉中の最高値を出した、——「一八六四年の春、ラシカシアはその繊維産業の長い不況からついに回復したように見えた。ブームがおこった。だがそれは綿花の先物にたいする『スペキュレーション・マニア』に墮落していった」(前掲ヘンダースン)、「いまはふたたび、気転がきいてかつほんのすこしのかねがあれば、ロンドンでかね儲けができる時期だ」(一八六四年七月のマルクスの手紙)。だが同年秋には和平の噂さと大量の輸入とから価格の急落が生じ——十月末二二ペンス——、「商業恐慌」(一八六四年十一月二日付エンゲルスの手紙)となった。価格は十一月、十二月二七ペンスにまで戻ったが、翌一八六五年にはすでに南部連合敗北は明らかとなり、一月からふたたび急落が、前年秋に増した幅で生じた。一月末二四ペンス $\frac{3}{4}$ 、二月末一九ペンス $\frac{1}{2}$ 、三月末一五ペンス $\frac{1}{4}$ 、そして四月末には一四ペンス $\frac{3}{4}$ となった。前年七月に比し「半分以下の減価だ」(一八六五年四月十二日付エンゲルスの手紙)。「綿花パニック」(一八六五年三月三日付エンゲルスの手紙)、「綿花恐慌」(一八六五年三月四日付マルクスの手紙、四月十二日付エンゲルスの手紙)。なお、前掲のようにエンゲルスはこの一八六五年四月十二日付の手紙でこのときの模様を述べ、「順番が銀行に廻ってくるにちがいない。そうなったところで事態は完成するのだ」と記したが、前年秋についてこのとき二つのリパールの銀行が破産したが、しかし影響はイングラ

ンド銀行には及ばなかった。

(5) 前に見たようにマルクスは『ブレッセ』一八六二年二月八日号の論説の表題で「綿花恐慌」と記し、また『資本論』第三部第一篇第六章第三節の表題で「一八六一—一八六五年の綿花恐慌」と記しているが、一八六一年の秋から一八六二年の春、それと一八六四年の秋から一八六五年の春、この二つの時期——つまり南北戦争のはじめとおわり——がばげしい混乱が生じた時期であった、と見受けられる。

これまで見てきたところから一八六一—一八六五年の動きを要約すると、右のごとくであった。こうしたことを念頭に置きつつ『資本論』での記述を見てみよう。

まず順序として第一部第四篇相対的剰余価値の「機械と大工業」の章で「綿業恐慌」について述べているところを——すでにその一部は見たが——掲げよう。マルクスはそこで一七七〇年から一八六三年までのイギリス木綿工業における景気循環をスケッチし、既掲のように「一八六〇年にはイギリス木綿工業の絶頂。インド、オーストラリアならびにその他の諸市場ははなはだ充溢して、一八六三年になってもまだ全ストックが吸収されなかったほどであった。……工場および機械の甚大な増加。一八六一年には昂揚がしばらくつづいたが、反動来、アメリカの南北戦争、綿花飢饉。一八六二年から六三年までは完全な崩壊」とし、ついで「綿花飢饉の件(Geschichte)は、あまりに特徴的であるので、すこしこれに触れておかないわけにはゆかない」としてつぎのように述べている(Bd. I, S.479—82, 長谷部訳、青木版七三一—五ページ。文中の太字は三宅がしたもの)。

「一八六〇年から一八六一年までの世界市場の状態から察せられることだが、綿花飢饉は工場主たちにとって具合の

よい時機にやってきたのであり、ある程度有利だったのであって、この事實は、マンチェスター商業會議所の報告中で承認され、議會ではパーマストンやダービーによって公言されたところであり、また諸々の出来事によって確証されるのである。「ここに註三三六として、『一八六二年十月三十一日の工場検査官報告書』、三〇ページ参照」という註を入れている」。もちろん、一八六一年には連合王国の木綿工場二八八七のうちには多数の小工場があった。工場検査官A・レッドグリーブ——彼の管区にはこの二八八七工場のうち二一〇九工場が入っている——の報告によると、この二一〇九工場のうち三九二すなわち一九パーセントはわずか一〇蒸気馬力未満を使用し、三四五すなわち一六パーセントは一〇馬力ないし二〇馬力未満を使用していたが、これにたいし二三七二工場は二〇馬力以上を使用していた（ここに註二三七として「同上、一九ページ」という註を入れている」。小工場の多くは織物工場であって、それらは一八五八年以来の繁栄期中に大部分投機師たちによって——彼らのうちのある者は糸を、別のある者は機械を、第三の者は建物を供給した——設立され、そして以前は監督だった者やその他の無資力者によって経営されていた。これらの小工場はたいてい破滅した。彼らは、綿花飢饉のために妨げられた商業恐慌によっても同じ運命に見舞われたであろう(Dasselbe Schicksal hätte ihnen die durch das Baumwollpech verhinderte Handelskrise bereitet)。彼らは工場主数の三分の一をなしていたとはいえ、彼らの工場に投ぜられていた資本は、木綿工業に投ぜられていた資本中の比較にならぬほどわずかな部分であった。麻痺程度についていえば、信頼すべき推定によると、一八六二年十月において紡錘の六〇・パーセントと織機の五八パーセントが休止していた。これはこの産業部門全体でのことであって、個々の地方々々ではなほだしい差異があったことももちろんである。全時間(週六〇時間)操業した工場はきわめてわずかしがなく、その他の工場は断続的に操業した。全時間を普通の出来高賃銀で就業した少数の労働者にとってさえも、上

等綿花が下等綿花に——シー・アイランド綿花がエジプト綿花に(細糸紡績工場のばあい)、アメリカ綿花やエジプト綿花がスラート(東インド)綿花に、また純粹な綿花が屑綿とスラート綿花との混合物に——代えられた結果、週賃銀が必然的に減少した。スラート綿花の纖維が短いこと、そのなかにごみの多いこと、糸がひどく切れやすいこと、縦糸の糊づけに澱粉に代えてさまざまな種類の重い成分を用いたこと、等々のため、機械の速度や、一人の織布工が見張ることのできる織機数が減少し、機械の過誤に伴う労働がふえ、生産物量とともに出来高賃銀が制限を受けたのである。スラート綿花を使用して全時間就業するばあい、労働者の損失は二〇パーセント、三〇パーセント、またそれ以上にもなった。しかも工場主の多くは、出来高賃銀の率をも五パーセント、七・五パーセント、また一〇パーセント引下げた。ここから、一週に三日、三日半、四日しか、あるいは一日に六時間しか就業しない労働者の状態がわかるであろう。すでに相対的好転(relative Verbesserung)が生じたのち、一八六三年においても、織布工や紡績工、等々の週賃銀は三シリング四ペンス、三シリング一〇ペンス、四シリング六ペンス、五シリング一ペンス、等々であった(ここに註三三八として『一八六五年十月三十一日の……報告書』、四一—四五ページ)という註を入れている)。こうした悲惨な状態のもとでも、工場主の発明心は賃銀引下げについて休むことを知らなかった。ときには、彼の綿花の粗悪や機械が適していないこと等々のせいである製品の欠陥にたいしても、罰として賃銀が削られた。また工場主が労働者の小屋の所有者だったばあいには、名目賃銀から差引いて家賃の代りとした。工場検査官レッドグレイブが自動機紡績工(self-acting minders)(彼ら是一对の自動ミール機の見張りをする)について語るところによると、『十四日間全時間作業し終わると八シリング一一ペンスの稼ぎとなり、この額から家賃が差引かれたが、工場主はそのうち半分を贈り物として返したので、紡績工が家に持帰ったのはまる六シリング一一ペンスだった。織布工の週賃銀

は、一八六二年の終りごろには、二シリング六ペンスから上にいくつかの等級があった』〔ここに註三九として「一八六三年十月三十一日の……報告書」四一、四二ページ〕という註を入れている⁽⁷⁾。職工たちがショート・タイムしか操業しなかったばあいさえ、家賃がしばしば賃銀から差引かれた〔ここに註二四〇として「一八六五年十月三十一日の……報告書」五一ページ〕という註を入れている⁽⁷⁾。ランカシアの二、三の地方で一種の飢饉からくる悪疫が発生したことはなんなら驚くにはあたらないのだ！だが、これらのいっさいよりもっと特徴的だったのは、生産過程の革命が労働者の犠牲において行なわれたことである。それこそ、解剖学者が蛙でやるような、本式の無価値体での実験 (experimenta in corpore viii) だった。工場検査官レッドグレイブはいう、『私はいくたの工場における労働者たちの現実の収入を挙げたのであるが、彼らが毎週同じ額をえているものと結論してはならない。労働者たちは、工場主がたえずやっている実験のためにきわめて大きな変動を蒙っているのであり、……彼らの収入は混合綿花の質につれて増減する。収入はときには彼らの以前の収入に一五パーセントも近づくと、次週かそのつぎの週には五〇ないし六〇パーセントも減少する』と〔ここに註二四一として「同上、五〇、五一ページ」という註を入れている⁽⁷⁾〕。かかる実験は労働者たちの生活手段を犠牲として行われるだけではない。彼らはその全五感まで犠牲にせねばならなかった。『解綿に従事する人々は、がまんできない悪臭で気持が悪くなる、と私に告げた。……混綿室や粗梳綿室、梳綿室で働く人々は、飛散する塵埃で目、鼻、口を刺激されて、咳や呼吸困難をおこす。……繊維が短いために、糸に糊付けするさい多量の材料が、しかも従来用いられていた穀粉に代る各種の代用物が、付加される。そのために織布工は吐気や消化不良がおきる。塵埃のための気管支炎、ならびに咽喉炎、さらにスラート綿花に含まれている汚物が皮膚を刺激するためにおきる皮膚炎がはびこる』。他方、穀粉の代用物は糸の重量を増加するので、工場主諸君にとってはフォルトゥ

ナトゥス〔空にならない財布の持主〕の財布であった。それは『一五封度の原料を、織り上げたときには二六封度の重さ』にした〔ここに註二四二として『一八六五年三十一日の……報告書』、六二、六三ページ〕という註を入れている。一八六四年四月三十日の工場検査官報告書ではつぎのように述べている、『この産業はいまではこの方策を真にあつかましい程度で利用している。確かな筋から聞くところによると、五封度 $\frac{1}{4}$ の綿花と二封度 $\frac{3}{4}$ の糊とで八封度の織物がつくられる。別の五封度 $\frac{1}{4}$ の織物には二封度の糊が含まれていた。これは普通の輸出向シャツ地であった。その他の種類にはしばしば五〇パーセントの糊が付加され、かくして工場主たちは、名目上織物に含まれている糸の費用よりもわずかのかねで織物を売ることによって儲けることを自慢することができ、またじっさいにも自慢している』と〔ここに註二四三として『一八六四年四月三十日の……報告書』、二七ページ〕という註を入れている。だが労働者たちは、工場内では工場主たちの、工場外では自治体当局の実験材料にされて、賃銀引下げと失業とに、窮乏と慈善とに、上下両院の賞め演説に、悩まされねばならなかったばかりではない。『綿花飢饉のために職を失った不幸な婦人たちは、社会の廃物となり、またそうなたままだった。……若い売春婦の数は、最近二十五年以来の増加以上に増加した』〔ここに註二四四として『一八六五年十月三十一日の工場検査官報告書』六一、六二ページ中のポールトン警察署長ハリスの書簡から〕という註を入れている。』

- (6) インステイトゥート版ひはじりは 238 „ Reports of Insp. of Fact. for 31st Oct. 1865, “ S. 41—45. ひなつじんが、初版では 238) „ Reports of Insp. of Fact. for 31st Oct. 1863, “ p. 41, 51. とひなつじん (初版 S. 44)”。あとで見るように、第三巻に報告書のこの箇所と見受けられる箇所が掲げられているが、それによって見ると、インステイトゥ

ート版の 1865 は 1863 の誤りであり、また初版の p. 41 は p. 41-43 あるいは版のようにならぬ。また他方イ版では p. 51 がまちがって落ちてゐる、このように見受けられる。

(7) インスタットゥート版ではこのように 239, Reports etc. 31st Oct. 1863, "S. 41, 42. となつてゐるが、註三三八前記のようにならぬ。31st Oct. 1865 の報告書はなほ同じく 31st Oct. 1863 の報告書であるから、同じくは前の註三三六-三三七のはあつと同じ書き方をすれば ebd. S. 41, 42. と改訂すべきであらう。なお初版では同じくは 239), Reports etc. 31st Oct. 1862, "p. 41, 42. となつてゐる(初版 S. 448)。この self-acting minders に同じくの話は第三巻を引いて「一八六三年十月」の工場検査官告報書「四一-四三ページ」から引用されてゐるなから、「私は Self-acting minders にかんする話を知つてゐる」云々として同じことがしてゐる(Bd. III. S. 156, 長谷部訳、青木版二〇八ページ)。初版ではこの 239) のところからページが S. 448 となつてゐる。I. c. (同十) によつて、わらわや、Reports etc."としたため 1863 となる。同じくは 1862 となるまが、いが印刷のうへで生じたのはあつうかと推測される。このあと註の 240), 241), 242) は同じく S. 448 とあり、すなはち I. c. p. 57. I. c. p. 50, 51. I. c. p. 62, 63, によつてゐる。あるが、肝腎の 239) が 1862 となつてゐるの、具合が悪うことになつてゐる。これらならぬ 1863 の Reports を指して loco citato (上記引用書中) としてゐるわけなのである。

ところでインスタットゥート版ではさきの註三三八のところから S. 481 となり、そこに註三三九、二四〇、二四一が入つており、同じく S. 482 と二四二が入つてゐる。この註三三八は前記のようにならぬ。1863 をまちがえて 1865 としてゐるが、これが印刷上のたんなる誤植でなかつたことは、同じく S. 三九を右のようにならぬ ebd. によつて、Report.....1863 "としてゐる。よつてから窺われよう。それはさて置いて、おかしうなつてゐるの註二四〇のうへに ebd. によつてゐる 240, Reports etc. 31st Oct. 1865, "S. 51. によつてゐる。そして 241. ebd. S. 50, 51. —のまゝ一八六五年——としてゐる。そして 242. ebd. S. 482 の註二四二を 242, Reports etc. 31st Oct. 1865, "S. 62, 63. によつてゐる。すなはち、ルクスとしては一八六三年十月の報告書を指してゐるものであるが——そして註二四〇はその S. 51 になつて S. 57 を——インスタットゥート版のこの誤り方はいささか念が入りすぎている。

なお、最近出された大月書店刊、国民文庫版『資本論』(3)では、これらがすべて訂正されてゐる。

右の第一巻での記述のうち、はじめの「綿花飢饉は工場主たちにとって具合のよい時機にやってきたのであり、ある程度は有利だった」というところはすでに前に見た。またそこで註を入れて参照としている一八六二年十月の工場検査官報告書三〇ページのおそらく当該箇所と見受けられる箇所が、『資本論』第三巻第六章「価格変動の影響」のなかの第三節「一般的例証、一八六一―六五年の綿花恐慌」で工場検査官報告書からの引用を列記しているところに掲げられていること——原稿の執筆時期はいままでもなくこの第三巻の方が先きであった——もすでに見た。さらにつけ加えて記しておく、第三巻の同じく右の第二節「資本の価値増大と価値減少、遊離と繫縛」のなかでマルクスはつぎのように述べている、——「原料たとえば綿花の価格が騰貴すれば、より低廉な綿花で製造された木綿商品——糸のような半製品、および、織物等々のような完成商品——の価格も騰貴する。まだ加工中の綿花の価値と同様に、未加工で倉庫にある綿花の価値も増大する。かかる綿花は、逡及作用によってより多くの労働時間の表現となるから、それが成分として入りこむ生産物にたいし、それ自身が最初にもっており資本家がこれに支払ったよりも高い価値を付加する。／＼だから、原料の価格が騰貴したときに多量の完成——完成の段階はとわれない——された商品が市場に存在するならば、この商品の価値が増加し、したがって現存資本の価値の上昇が生じる。生産者の手にある原料等々の在荷についても同じことがいえる。この価値増大によって個々の資本家は、または資本の特定の生産部面全体も、原料の価格騰貴による利潤率低落を償うことが、または償ってあまりあることが、ありうる」と(Bd. III, S.134, 長谷部訳、青木版一八三ページ)。

つぎの、一八六一年における木綿工場二八八七のうちには多数の小工場があった云々というところに、「同上、一九ページ」と、つまり一八六二年十月の工場検査官報告書のページを註記しているが、前に触れておいたが報告書のこ

の箇所の引用もまた右の第三節下に掲げられている。すなわち右の第三節は節全体が工場検査官報告書の引用から編成されているが、その「一八六二年。十月」のところ、「最近の官庁統計によれば、一八六一年に連合王国には二八八七の木綿工場があり、そのうち二二〇九は私の地方（ランカシアおよびチェシア）にあった」云々という記述が、一八六二年十月の報告書「一八、一九ページ」として掲げられている（Bd. III, S. 154, 同上訳、二〇六ページ）。なお、この「一八、一九ページ」のところではさらに、「これらの小工場主たちのきわめて大きな部分——総数の三分の一以上——は、すこし前までは彼ら自身が労働者であった。彼らは資本にたいする支配力を持たぬ人々である」云々と記しているが、第一巻の右につづく、これらの小工場の大部分は「以前は監督だった者やその他の無資力者によって経営されていた」とか、「彼らは工場主数の三分の一をなしていた」といった記述も、ここから採られたものである。

また第一巻で右につづいて「麻痺程度」について一八六二年十月の状態を記しているが、第三巻では右の「一八六二年。十月」のところ右の報告書「一八、一九ページ」からの引用について「一九、二〇ページ」の記述によったものとして、「同じ報告書によれば、ランカシアおよびチェシアの綿業労働者のうち、当時、完全就業者は四〇、一四六人すなわち一一・三パーセント、労働時間を制限された就業者は一三四、七六七人すなわち三八パーセント、失業者は一七九、七二一人すなわち五〇・七パーセントであった。このうちから、マンチェスターおよびポルトン——この両市では、主として、綿花飢饉によって影響されることが比較的すくない細番手の糸が紡がれている——にかんする数字を差引いてみると、事態は一そう悪くなる。すなわち、完全就業八・五パーセント、制限された就業三八パーセント、失業五三・五パーセントである」と記している（Bd. III, S. 154-5, 同上訳、二〇七ページ）。第一巻

での「麻痺程度」についての記述も、一八六二年十月の工場検査官報告書のこのあたりならびにこの前後あたりに拠ったものであったのであろう。なおこのマンチェスターなどの細番手の糸が紡がれているところでは就業状況が他の地に比してよいことについては、第三巻の右の「一八六二年。十月」の前の「一八六二年。四月」のところ、一八六二年四月の（といっても四月以後にわたっていたわけであるが）工場検査官報告書が、目下の失業綿業労働者の比率は一八四八年恐慌のさいよりそれほど大きくはないとして、一八四八年五月のマンチェスターでの数字にたいし一八六二年五月同じくマンチェスターにおいて失業が一五パーセント、ショート・タイム就業が一二パーセント、フル・タイム就業が四九パーセントだとし、そして近隣地方、たとえばストックポートでは部分就業者および完全失業者のパーセンテージはより高く、完全就業者のそれはより低かった、というわけは、ここではマンチェスターにおけるよりも太番手の糸が紡がれるからである、と記していることを掲げている(Bd. III, S. 154, 訳、二〇六ページ)。

第一巻ではつぎに、原料として使う綿花の質が悪くなったので、出来高賃銀が前どおりだとしても週賃銀が減少したこと、それは、原料が悪くなったため機械の速度や、一人の労働者が見張ることのできる機械の台数がへったためなどであること、そしてこうした賃銀の減少がどの程度であったかについて記し、またそこに一八六三年十月の報告書の「四一、五一ページ」とページだけ註記している。この原料として使う綿花の質の悪化、それが労働者の賃銀その他に及ぼした影響は当時大きな問題であつたらしく、第三巻のここの「一般的例証、一八六一―一八六五年の綿花恐慌」の節で多くの工場検査官報告書からの引用を編成するに当って、最初の小見出し「前史、一八四五一―一八六〇年」、第二の小見出し「一八六一―一八六四年。アメリカの南北戦争。綿花飢饉。原料の欠乏と騰貴による生産過程中断の最大事例」につづく第三の小見出しを「屑綿。東インド綿花(スラート)。労働者の賃銀にたいする影響。機械の改良。澱

粉および鉱物による綿花の代用。この澱粉整糸が労働者に及ぼす影響。細番手糸の紡績業者。工場主の欺瞞」とし、また第四の小見出しを「無価値体での実験」——質の悪い綿花を使ったり、屑綿をいろいろの割合で入れたたり、糊の分量や材料を変えたりする試み——としている。

既述のようにこの小見出しはおそらく第三巻を編集したエンゲルスがすこしでも読みやすいようにとつけたものと思われるが、ここの報告書からの引用は他方で、第二の小見出しのところは「一八六〇年。四月」から同年十月、一八六一年四月、そして最後に「一八六一年。十月」というように年月を追った形で掲げられており、また第三の小見出しのところもはじめの数箇の引用文——これらは一八六四年四月、一八六三年十月、一八六一年四月などの報告書から採られている——をすぎると、ふたたび「一八六二年。四月」、「一八六二年。十月」、「一八六三年。四月」としてそれぞれそのときの報告書からの引用を掲げ、ついで一八六三年十月の報告書からのいくつかの引用を掲げたのち、おわりに「一八六四年。四月」として一八六四年四月の報告書からの引用が掲げられている。ついで第四の小見出しのところでは一八六三年十月の報告書からのいくつかの引用がなされている。このようにこの第三節の編成は一つには年月を追っている形が採られているとともに、そのなかに小見出しがつけられており、そしてこの小見出しはかならずしもその項下に掲げられている報告書からの引用の内容のすべてを蔽っているものでないとともに、この小見出しによって報告書を年月を追って掲げるといふ形が若干くずされているのである。第三巻のここでの報告書の引用はこのようになされているのであるが、ともかくこの綿花の質の悪化に伴った問題は、失業とともに、第三、第四の小見出しのもとで掲げられている報告書からの引用の主たる内容の一つをなしている。綿花飢饉に対処するために世界の各地に手を拡げて綿花の輸入が計られたが、こうして入ってきた綿花は質が悪かった。そこでこの質の悪化に

伴う問題が出てきたわけである。

第三巻ではこの週賃銀の減少にかんしては、さきの一八六二年十月の報告書の「一八、一九ページ」「一九、二〇ページ」からの引用について「二七ページ」からの引用として、質の悪い綿花が使用されるようになったので「労働者たちはいまや、もとの出来高賃銀ではがまんのできる賃銀をもらはうることができなくなった。……若干のばあいは、不良綿花の使用による相違が、全時間就業のばあいでさえ総賃銀の半分に達した」ということを掲げているが(Bd. III, S. 155, 訳「二〇七ページ」)、さらにこの「一八六二年。十月」につぐ「一八六三年。四月」のところで「東インド綿花を使用するばあいの重大な不利益は、機械の速度がはなはだしく緩慢にされねばならぬことである。……速度の減少は、工場主にたいしてと同様に労働者にたいしても影響を与える。というのは、労働者の多数は出来高賃銀で支払われるし、また週賃銀で支払われる他の労働者のばあいでも、生産が減少する結果として賃銀が減少するだろうからである。私の調査……および私の提供した本年中の綿業労働者の稼ぎ高の表……によると、一八六一年に支配的であった賃銀の高さと比較して、平均二〇パーセント、若干のばあいには五〇パーセントの減少となる」という記述を掲げている(Bd. III, S. 155, 訳「二〇七八ページ」)。そしてこれについて「一八六三年十月」の報告書の「四一—四三ページ」からの引用が掲げられており(Bd. III, S. 155—6, 訳「二〇八九ページ」)——そのなかで「多くのばあい労働者の賃銀は直接に(geradezu)五パーセント、七・五パーセント、また一〇パーセント引下げられた」と記している——、また第四の見出し「無価価体での実験(Experimente in corpore vili)」のところで同じく一八六三年十月の報告書の「五〇—五三ページ」「四三、四四、四五—五〇ページ」から同じく賃銀減少の事例についての引用が掲げられている。——この「四三、四四、四五—五〇ページ」のところでは「多量の屑綿がインド綿花と混

合するために使用されているある広汎な地方では、紡績工は五パーセントの賃銀引下げをされたほか、さらにスライト綿花と屑綿との加工の結果として二〇—三〇パーセントの損失を受けた」として記されており、また第一巻で記している三シリング四ペンス、四シリング六ペンス、五シリング一ペンスといった週賃銀が同じくこの箇所および「五〇—五三ページ」からの引用のところでしるされている。

なお、一八六三年十月の報告書の「四一—四三ページ」から引用しているさきの箇所なかで、「労働者の状態は、稼いだ賃銀額にかんしていえば、現在（一八六三年十月）、前年同期よりもはるかに良好である（sehr viel besser）。機械が改良され、原料にかんする知識がふえ、労働者たちは、はじめの間斗わねばならなかった諸困難を容易に処理するようになっていゝ」とし、一八六二年春ないし一八六二年の終りの数カ月の賃銀について記したのち「たいいていゝの地方での稼ぎはいまでもなおきわめて減少しているとはいへ、現在でははるかに健全な状態（ein viel gesunder Zustand）となっている」と記している（*Bd. III, S. 155—6, 訳二〇八ページ*）。（そして、しかしなお一八六〇年—一八六一年——この当時は綿業労働者の賃銀は従来よりも上がっていたのであるが——に比してずっと低かったわけである）。第一巻のさきのところで「すでに相対的好転が生じたのち、一八六三年においても」といつていたことが想起されよう。このころ従来の滞貨がさばかれ、また各地からの綿花の量もふえてきたが、労働者の稼ぎ高も前の一ころにくらべれば良くなつてきていたわけである。

第一巻でつぎに挙げていゝ賃銀からの家賃の差引きについては、そこで引用している一八六三年十月の工場検査官報告書の同じ記述が第三巻でその前後とともに掲げられていることは、さきに註で記しておいたが、第一巻でそのつぎにショート・タイムをしているばあいでも家賃の差引きがしばしば行なわれたとし、ここで註二四〇として一八六三

年——インステイトゥート版では一八六五年——十月の報告書五七ページ——インステイトゥート版では五一ページ——を挙げてはいるが、この一八六三年十月の報告書の五七ページのところも第三巻で報告書からの引用を列記している最後の方で「家賃」として引用が掲げられている(Bd. III, S. 160-1, 訳、二二三ページ)。

第一巻ではつぎに、工場主たちが原料として使う綿花に綿屑をいろいろの割合で混合したり、糊の分量をふやしたりその材料を悪くしたりしたことを、労働者にとってこれは解剖学者が蛙でやるような無価値体での実験と同じものだったとし、労働者はこれによって同じ時間内に仕上げうる製品量がちがってくるので出来高払の賃銀がそのときどきで変動に曝され、また健康を害すことになったが、しかし工場主はこの糊付けの分量をふやすことで儲けたと記しているが、そこで最初に引用している一八六三年十月の報告書「五〇、五一ページ」の記述は、第三巻で「無価値体での実験」という小見出しをつけているところの最初に掲げられている(Bd. III, S. 159, 訳二一一—二二ページ。しかしこれまでの他の箇所でもそうであったが、報告書の文を引用するに当って第一巻での独訳と第三巻での独訳とは同じではない)。第一巻でつぎに挙げてはいる糊付けについての記述は、第三巻では、それが労働者の健康のうえに及ぼした影響について述べている報告書の箇所は掲げられていないが、しかしそれが賃銀に及ぼした影響、また工場主は糊付けの分量をふやすことによって儲けたということは、第三巻の方でも同じく掲げられている。すなわち第一巻でさきのつぎに同じく一八六三年十月の報告書「六二、六三ページ」から引用している記述のうち、「六三ページ」の箇所は第三巻でも掲げられており(S. 153, 訳、二〇五ページ。なお第一巻のインステイトゥート版では「一五封度の原料を、織り上げたときには二六封度の重さ」にしたとなっているが、第三巻では「一五封度の糸が、織り上がったときには、二〇封度になる」としてはいる。第一巻の初版でもここは「二〇封度」となっているから、第一巻イ版の「二六封度」はおそらく誤植であろう)、またつぎ

の一八六四年四月の報告書「二七ページ」として引用されている記述は第三卷ではそのすこし前の方とともに掲げられている（S. 152—3、訳、二〇四—五ページ）。なお、これら一八六三年十月の報告書「六三ページ」、一八六四年四月の報告書「二七ページ」の箇所は第一卷では上記のように無価値体での実験の例として挙げられているのであるが、第三卷では第四の小見出し「無価値体での実験」のところではなく、第三の小見出しを前記のように「屑綿。……澱粉および鉱物による綿花の代用。この澱粉整系が労働者に及ぼす影響。細番手糸の紡績業者。工場主の欺瞞」として、そのはじめのところに掲げている。そして他方において、前記のように、第三卷で「無価値体での実験」という小見出し下に掲げられている記述が、第一卷ではその前の綿花の質が悪くなったため賃銀が減少した事例として挙げられている——そしてしかもマルクスは第一卷ではこうした賃銀の減少について述べてきたのち、「だが、これらのいっさいよりもっと特徴的だったのは、生産過程の革命が労働者の犠牲に行なわれたことである。それこそ……本式の無価値体での実験だった」と述べている——、ということが見られる。

以上、第一卷第十三章第七節の「綿業恐慌」のところでの記述と第三卷第六章第三節の「綿花恐慌」のところの記述とを対比して見てみた。第三卷のこの箇所では、このほか綿業労働者の失業、救恤状況、移住などについての工場検査官報告書の記述を掲げているが、失業、救恤については前にすこし見たので、移住問題について掲げているところを見てみよう。

第三卷では報告書からの引用を列記している最後の方で、前掲「家賃」について「移住」としてつぎのように記している、「工場主たちはもちろん労働者の移住に反対であった。というのは、一面では彼らは『木綿工業にとってのよりよい時代を期待して、彼らの工場をもっとも有利な方法で経営するための手段を手放さないでおこうとした』か

らである。だが他方ではまた、『多くの工場主は彼らの雇傭している労働者の住む家屋の所有者であつて、すくなくとも彼らの若干は無条件に、滞納家賃の一部分を後に支払わせようと当てにしている』からである (一八六三年十月の報告書「九十六ページ」) (Bd. III, S. 161, 訳「二二三ページ」)。また S. 157, 訳「二〇九ページ」。

この、当時の移住問題については『資本論』第一巻のなかでもいくつかの箇所を取り上げられている。上記のようにマルクスは「綿花飢饉の件」について述べたのち、一七七〇—一八一五年の四十五年間はイギリス木綿工業が世界市場を独占していた時期で、不況、沈滞の年は五年しかなかったが、これに比し一八一五—一六三年の四十八年間においてはヨーロッパ大陸およびアメリカ合衆国との競争がはじまったので、一八三三年以来アジア市場の暴力的拡張が行されたにもかかわらず、不況、沈滞の年が二十八年になっていると述べ、そして「成年男子綿業労働者の状態が繁栄期中でさえどんなものであつたかは、付記の註から判断されうるのである」として、一八六三年四月の工場検査官報告書のなかから、同年春に出された移住協会設立のために移民の必要を説いている綿業労働者の檄を掲げている (Bd. I, S. 483, 長谷部訳、青木版七三六ページ)。マルクスはまた別の箇所で、「労働者階級の再生産は、同時に、一世代から他の世代への熟練の伝達および堆積を含む。どんなに資本家がかかる熟練労働者階級の定在を彼に属する生産諸条件の一つに数え、かかる階級を事実上彼の可変資本の眞の存在と看なしているかは、恐慌によつてかかる階級が失われそうになると、わかる」と述べ、この綿花飢饉当時の移住についての論議をその例証として挙げている、——

「アメリカの南北戦争とそれに伴つた綿花飢饉との結果として、周知のように、ランカシア等々における多数の綿業労働者が街頭に投げ出された。労働者階級自身ならびにその他の社会層の間から、イギリスの植民地または合衆国への『過剰人口』の移住を可能にするための国家の補助または国民の自発的寄付を求める叫びがあげられた。その当時

『タイムズ』紙（一八六三年三月二十四日付）は、マンチェスター商業会議所の前会頭エドマンド・ポッターの書簡を公けにした。彼の書簡は下院で正当にも『工場主たちの宣言』と名づけられた。ここに、労働力にたいする資本の所有権を卒直に表明している若干の特徴的な箇所を挙げよう。そしてマルクスはポッターの書簡およびこれにたいする『タイムズ』紙の反論を掲げ、けっきょく「彼らの移住は阻止された。彼らは綿業地方の『道徳的救貧院』に閉じこめられた」、⁽⁸⁾「議会は、移住のための一文の支出も決議しないで、ただ、自治体当局をして労働者たちを生死の間に維持することを、すなわちノーマルな賃銀を支払わないで彼らを搾取することをえせしめる条例を決議しただけだった〔一八六三年の Public Works Act. Bd. III, S. 157, 同上訳、一〇九—一〇ページ参照〕」と記しつゝる（Bd. I, S. 602—6, 同上訳、八九六—九〇ページ）。綿業労働力を確保しておこうとして移住に反対し、そして辛じて生命を維持する賃銀で公共事業の仕事を与えておこうとしたわけである。「最悪の犬賃銀を与えて労働者がこれを受取るうとしなかったばあいには、扶助委員会はその労働者を扶助表から消した〔仕事を与えられると、その仕事を受けるといなどにかかわらず被救恤者のリストから消されたということ〕。労働者たちは飢死するか、さもなければ、ブルジョアにきわめて有利などんな価格でも労働せざるをえなかった、というかぎりで、これは工場主諸君の黄金時代であった。同時に工場主たちは、政府との默契により、できうるかぎり移住を阻止した」（Bd. III, S. 157, 同上訳、二〇九ページ）。

(8) この公共事業、「国民作業場 (ateliers nationaux) の新版」についてはさきに一八六四年十一月九日付のエンゲルスの手紙を見たとき、『資本論』Bd. III, S. 159 のマルクスの記述を掲げておいたが、なお Bd. I, S. 442—3 の註一八三（長谷部訳、青木版六八三—三ページ）参照、——「失業した線業労働者は正規の労働者〔都市の土木事業の〕と競争させられた」。

第三卷のさきの第三の小見出しのなかでは「機械の改良」という見出しを入れているが、これについてはそこではただ一八六三年十月の報告書で労働者の稼ぎ高が前よりはふえたとしているところで、「機械が改良され」と記されているだけであるが、この機械の改良については第一巻でつぎのように述べている。

すなわちマルクスは、「イギリス木綿工業の絶頂の年であった一八六〇年に、だが、つづく三年間にアメリカの南北戦争の刺激のもとでもたらされたところの、機械の飛躍的な (galoppierend) 改良とそれに応じての手労働の駆逐とを予想したのであるか?」として、一八六三年十月の工場検査官報告書から、機械の改良によって労働者および賃銀がいちじるしく節減された事例——紡績工場あるいは羊毛工場の——を掲げている (Bd. I, S. 456-7、長谷部訳、青木版六九九—七〇〇ページ。なお Bd. III, S. 121-2、同上訳、一六七一—八ページ参照)。綿花飢饉に加えて、かかる機械の改良による労働者の「節減」が行なわれたわけである。そしてマルクスはそこにつぎのような註を入れている、——「綿花恐慌中における機械の急速な改良は、イギリスの工場主たちをして、アメリカの南北戦争が終るやたちまちのうちに世界市場をふたたび充溢することをえせしめた。織物はすでに一八六六年の終り六ヵ月中にはほとんど売れなくなった」云々と (Bd. I, S. 457-8、訳、七〇一—二ページ)。マルクスまた『資本論』の初版を書いたのち、右の記述につづけて、この「機械の飛躍的改良」について、「イギリスの木綿工業における、アメリカの南北戦争に負う機械の改良の総結果」を示すものとして、一八五八年、一八六一年、一八六八年のそれぞれの工場数、蒸気織機数、紡錘数、就業人員数の数字を掲げ、そしてつぎのように述べている、——「つまり、一八六一年から一八六八年までに三三八の木綿工場が消滅した。すなわち、より生産的なより大規模な機械が、より少数の資本家の手に集中された。

蒸気織機数は二〇、六六三台だけ減少した。だが同時に、その生産物は増加したのであって、いまや改良された織機一台は旧式なそれよりも多くの仕事をしたことになる。最後に、紡錘数は一、六二二、五四一本だけ増加したが、就業労働者数は五〇、五〇五人だけ減少した。かくて、綿花恐慌によって労働者が陥った『一時的な』窮乏は、機械の急速かつ持続的な進歩によって、強められ固定されたのである (wurde gesteigert und befestigt) (Bd. I, S. 457-8, 訳、七〇一—三二二頁)⁽⁹⁾

(9) この機械の発達は、いうまでもなくこの期にだけ大きく行なわれたことだったわけではない。マルクスは一般的に——つまり木綿工業にかぎらず——、「一八四八年から現在までの、すなわち十時間労働日の時代のイギリス工業のはげしい前進が、一八三三年から一八四七年までの時期、すなわち十二時間労働日の時代を凌駕してゐる程度は、後者が工場制度の開始以来の半世紀、すなわち無制限労働日の時代を凌駕した程度よりもはるかに大きい」(Bd. I, S. 458—9, 訳、六七七ページ)とし、そしてまた「一八四八年から一八五六年までの八年間には十時間労働日の支配のもとで、イギリスの工業の進歩は大きなものだったが、その進歩も、一八五六年から一八六二年までのつぎの六年間にはふたたびはるかに凌駕された」として、一八六二年十月の工場検査官報告書から絹工場と梳毛糸工場の例をとり、一八五六年—一八六二年の間に絹工場において「紡錘数の増加は二六・九パーセント、織機の増加は一五・六パーセント、それと同時に労働者数の減少は七パーセント」であったし、また同じくこの期間梳毛糸工場において「織機の数は非常に増加したにもかかわらず、就業労働者の総数は減少し、搾取される児童の数は増加した」と記してゐる (Bd. I, S. 437, 訳、六七四—五ページ。なお同じく S. 439—40 の註一七八、訳、六七七—九ページ参照)。

なおマルクスは右につづいて、一八六三年四月二十七日に国会議員フェランドは下院で、「ランカシアおよびチェシアの十六地区の労働者代表たちが——その委託を受けて私は語るのだが——私に伝えたところでは、機械の改良の結果として諸工場における労働はたえず増大しているとのことである。従来は一人が助手とともに二台の織機を扱っていたのに、いまでは助手なしで三台を扱い、また一人で四台を扱うようなこともけっしてめずらしいことではない。挙げた事実からわかるように、十

二時間労働はいまでは十労働時間よりもすくない時間のなかに圧縮されているのである「云々と述べていることを掲げている (Bd. I, S. 437-8, 訳、六七五—六ページ)。さきに一八六三年十月の工場検査官報告書で、原料綿花の粗悪化や、糊付けの分量をふやしたりその材料を悪くしたりしたので、機械の速度を緩慢にせねばならなく、また一人の見張りうる織機台数がへり、そのため出来高賃銀の減少となった、と記していることを見たが、右でいっていることは機械の改良の結果として一般に労働の強度が強まったということで、これと矛盾することではないであろう。なおこのフェランド云々は典拠がしるされていないが、おそらく一八六三年四月の工場検査官報告書から採られたものと思われる。

(10) W. O. ヘンダーソンは、綿花飢饉中のこうした合理化措置——工場の新、増設、機械の改良、更新——は、在庫品を高い価格で売ることができた製造業者の儲け、これに銀行業者が業界の前途にコンフィデンスを持っていたことが結びついて行なわれたものであり、一八五九—一六一年のブームにつづく綿花恐慌のはじめの間はたいしてなされなかったが、「一八六三年ごろには、以前契約されていた工場建設が再開されたばかりでなく、工場の新規注文がなされ、既存設備の近代化への努力が行なわれた」とし、一八六三年四月、十月の工場検査官報告書などから各地のこの状況を記している (op. cit. p. 17-8)。

『資本論』のなかでは以上に挙げたほかにもなおいくつかの箇所での綿花飢饉、綿花恐慌のときの事例について記している。つぎに移る前に、ここでそのなから二、三の箇所を拾って掲げておこう。

たとえばマルクスは第一巻の価値増殖過程について論じているところで、「俗流経済学によく通じている資本家はおそらく言うであろう、自分は自分の貨幣を、より多くの貨幣にする意図をもって投下したのだ、と。だが、地獄への道はいろいろな良い意図をもって舗装されているのであって、彼は同じように、生産することなしに金儲けする意図をももちえたのである」とし、そこにつぎのような註を入れている。「かくしてたとえば、資本家は一八四四—四七年には、彼の資本の一部分を生産的事業から引上げて、これを鉄道株の投機で失った (verspekulieren)。また、アメリカの南北戦争時代には、工場を閉鎖し工場労働者を街頭に投げ出して、リバプールの綿花取引所で投機をやった

(spielen)」(Bd. I, S. 200, 長谷部訳、青木版三五〇二ページ)。

またたとえば、同じく第一巻で労働者は生産手段にたいしてあらたな労働を加えることにより、新価値をつくり出すが、とともに生産手段の価値をあらたな生産物に移すのだという説明をしているところで、「事業が景気がいいかぎりには、資本家は貨殖に没頭するあまり労働のこの無償の贈り物に気がつかない。労働過程の強行的中断たる恐慌は、彼をしてこれを痛切に感じさせる」と述べ、その例としてそこに「一八六二年十一月二十六日の『タイムズ』紙上で、ある……工場主〔紡績工場主〕が、彼の工場の毎年の休業費 (Stillstandskosten) を公衆に向けて嘆じている」とを挙げ、休業中にも支払わねばならない地代、租税、保険料、一年契約の労働者や支配人や簿記係や技師、等々の給料のほか、工場をときどき暖めたり蒸気機関をときおり運転したりするための石炭費や、ときおり労働によって機械を動くように維持しておく労働者の賃銀が一五〇ポンド、機械は運転を中止していても自然に腐朽することは免れないのでその損傷がすくなく見積っても一、二〇〇ポンド、これらを合せて休業中にも支払わねばならぬ休業費を六、〇〇〇ポンドと見積っている」と記している (Bd. I, S. 215-6, 長谷部訳、青木版三七二ページ。なお同じく第一巻 S. 294 の註一四六では、この紡績工場主が機械のいわゆる道徳的磨損について語っていることを掲げている)。綿花飢饉中の例である。また第三巻の「不変資本充用上の節約」のところでは、「数多くの経常的費用は、労働日が長くても短かくても、ほとんどあるいはまったく変りがない」とし、そこで「国税および地方税、火災保険料、種々の常備者の賃銀、機械の減価、その他工場における種々の費用は、労働時間が長くても短かくても同じようにかかる。生産が減少するの比例して、この費用は利潤に対比して大きくなる。(『一八六二年十月の工場検査官報告書』 一九ページ)」と記している (Bd. III, S. 97-8, 長谷部訳、青木版一四〇ページ。なお第一巻 S. 286 の註一五二では、この一八六二年十月

の報告書のこの箇所が報告書からの直接の引用の形で掲げられている。

またたとえば、さきに一八五七年恐慌について見たさい、第一巻のなかで、「恐慌は——そのさいには生産が中断されて、『短時間』しか、週のうち二、三日間しか作業が行なわれないのであるが——もちろん、労働日を延長しようとする衝動になんら影響しない。……かくして工場検査官たちは、一八五七年から一八五八年にいたる恐慌期についてつぎのように報告している」として一八五八年四月の工場検査官報告書を引いていることを見たが（一八五七年恐慌」（元）、二二—二三ページ）、このあとつづいてマルクスは、「同じ現象は、一八六一年から一八六五年にいたるおそろしい綿花恐慌（furchtbare Baumwollkrise）中にも、より小さい規模でくり返されている」とし、そこに『一八六一年四月三十日に終る半年間の工場検査官報告書』、付録第一号を見よ。『一八六二年十月三十一日の……報告書』、七、五二、五三ページ。違反は一八六三年の後半からふたたび多くなっている。『一八六三年十月三十一日に終る……報告書』、七ページ参照」という註を入れている（Bd. I, S. 250, 長谷部訳、青木版四二—二三ページ）。また同じく第一巻の第二十三章で産業予備軍について記しているところでも、「労働者階級の就業部分の過度労働は彼らの予備軍を膨脹させるが、他方では逆に、予備軍がその競争によって就業者に加える圧迫の増加は、就業者をして過度労働と資本の命令下への隷属とを余儀なくさせる」云々と述べ、そこに註を入れて、「一八六三年の綿花飢饉中でさえ、ブラックバーンの綿紡績工の一パンフレットには、過度労働にたいする猛烈な非難が見出される」とし、『一八六三年十月三十一日の工場検査官報告書』からつぎのような記述を引用している、「怠惰を余儀なくされてはいるが自分の家族を養い仲間を過度労働による早死から救うために短い労働時間でも働きたがっている者がたくさんいるにもかかわらず、この工場では成年工が一日に十二時間ないし十三時間の労働を要求された。……この地方には、労働を公正に

配分しさえすれば、すべての者を部分的に就業させるに十分なすべき仕事がある。われわれは雇主にたいして、他の労働者が労働欠乏のために慈善によって糊口することを余儀なくされているのに一部の労働者に過度労働をさせたりしないで、すくなくとも現在の事態がつづくかぎりは一一般にショート・タイムで働くことを懇願するのであるが、これは正当な要求にほかならない」(Bd. I, S. 670-1, 同上訳、九八五―六ページ。なおさきでは同報告書の「七ページ参照」としているが、ここでは右の記述のページは「八ページ」としるされている)。

またたとえば、第一巻で機械の採用が労働者に及ぼす直接的影響を論じているところで、機械は婦人および児童を工場で使用するための手段となり、それによって家庭内の自由な労働が奪われるようになったとし、そこに註を入れて、「アメリカの南北戦争に伴っておきた綿花恐慌中に、綿業労働者の健康状態にかんして報告するためにイギリス政府によりランカシア、チェシア、等々に派遣された」ドクター・エドワード・スミスはつぎのような報告、すなわち「労働者が工場の雰囲気から追出されたことを別としても、恐慌は衛生上ほかにもいくたの利点をもっている」、労働婦人たちが子供に乳房を与えたり、料理をおぼえたりする暇ができ、労働少女たちが慈善施設で裁縫をおぼえたりすることができたという報告をしていると記し、そして「全世界のために糸を紡ぐ労働少女が裁縫をおぼえるためには、アメリカの革命と世界恐慌(Walkrise)とが必要なのだ」と記している(Bd. I, S. 43-4, 同上訳、六四三―四ページ。なおBd. I, S. 442-3の註一八三参照)。またマルクスは同じく第一巻の資本制的蓄積の一般的法則のところ、その例証の一つとして「イギリスの工業労働者階級の薄給層」の状態について述べているが、そこでも「綿花飢饉中の一八六二年に、ドクター・スミスが樞密院から、ランカシアおよびチェシアにおける衰弱した綿業労働者の栄養状態にかんする調査を委嘱された」として、スミスはそれ以前の多年にわたる観察によって、飢餓病を免かれ

るためには成年男女は週にすくなくともどれだけの炭素、どれだけの窒素を摂取することが必要だという結論を出していたが、「彼の計算は、窮乏のために綿業労働者の消費がそこまで押し下げられていた悲惨な栄養分量との一致によって、驚くほど实际的に確証された」ということを数字を掲げて記している (Bd. I, S. 690—2, 同上訳、一〇一一—三ページ)。